八代集抄

古今春上下夏

特別
イ4
3163
104(2)

貴
14
3163
104(2)

宮内庁書陵部

古今和歌集巻第一

春歌上

ゝるとしにすこしあまりてはるたちけるひよめる　在原元方

としのうちにはるきにけりひとつをぞ
こそことしとやいはんことしとやいはん

春たちける日よめる　紀貫之

袖ひちてむすびしみづのこほれるを
はるたちけふのかぜやとけらん

宮内庁書陵部

ゝるとしにすこしあまりてはるたちけるひよめる

一年を二年にかけてはるたちぬるとは
乃ちこそ今年はことしとはいへ
ことしとはいはんとこそ
新古今の詞書にはかくいはるゝなりきし俊成
元貞八雲御抄梁塵
也高集の歌にも同
此詞ありさこそ

春たちける日光孝
袖ひちてむすびしみづのこほれるを
はるたちけふのかぜやとけらん

とあるをいへる月令に云立春ノ日東風解ク凍ヲといへる心朗詠に云池ノ凍ノ東頭ハ
風度ワタテ解ク といへる此歌の心にあるをひきていひなして此歌は古今集
おりしは撰りすくれる拾遺集のうち此歌を撰すへからすとそ後徳
定家卿のいへる　僻案抄
題しらす　読人しらす

春かすみたてるやいつこみよしのゝ
よしのゝ山に雪はふりつゝ

もとは知くかねもと
へし撰には歌ふ家よ
みえもとより拾遺集
には古今集によりし歟
よみ人しらす　此歌
はいねしもと高僚
人をは隠して申す
下位の人をいふ名を附
いはす古今集は色
春くすみたてるや
霞の立するにつけても吉野の山には雪の降

二条乃きさきの春のはしめの御うた　高子中納言長良女清和后陽成院母后

雪乃うちに春はきにけり鶯乃
こほれる涙いまやとくらん

ゆきは吉野乃里とみなしまことゝしらすしてとらへてよめる此さてこそやはら
ことは古訓む僻也と古人いへり三吉野の吉野の山と付けたる心なし
るすをかさねたるも三吉野は郡の名よしのの山は吉野の山さ雪の
のちにかはらすよめることしも一様にいふよりもならむへし山桜
そのこゝろし

顕注
雪のうちに春はきにけり　古年乃雪はきえぬさきに年のうちに春はきたれは凍の
氷雪ともにとけて鶯もその時待出て花を木傳はむ
流るゝ涙のこほりもとけなんとよめり鶯乃なかれる涙とあれと
啼とはよまずて涙といひ涙のこほりをとくとよみなしてあはれに

梅の枝にきゐる鶯
春かけて　冬過春　梅の枝に
鶯は来居てなけと
いまた花のやうに
雪はふることもあり
てといへるは冬の雪の近いことをいふ其雪の上の中に梅の枝の雪

題しらす　よみ人しらす

梅か枝にきゐるうくひす春かけて
なけともいまた雪はふりつゝ

素性法師　素性ハ遍昭乃俗の時の息也法師のよ子ヾ世流布ニ出家をハ皆すてしと云勅撰ニとふハ皆かくしとよむへし
春たてハ花とや春立てハ花とや見らん雪の降く枝ニ鶯の鳴こと見らんハ見るらんといふ文字おかれたると略したる見らんとハ羽万葉ニおほくよめり是解案抄略注

雪乃木にふりかゝれるをよめる

素性法師　良岑宗貞子　花山僧正　えん法く

春たてハ花とや見らん白雪の
かゝれるえたにうくひすのなく

題志らす　読人志らす

こゝろさしふかくそめてしおりけれハ
きえあへぬ雪乃花と見ゆらん

ある人乃いはくさきのおほき　太政大臣也
おほいまうちきみのうたなり

二条乃后乃とうくうのみやすん所　依春宮母儀也

心さしふかくそめてし詞ハ心ふかく染て折けれハ消やらぬ雪の花と見ゆると也折けれハを一段ニ斷折けれとよむへしと云折けれハ其心ある心しておりすると云ひなれハとかけるをなれと也ハ又よむとせは其ハ后の御うけまする折けれハを用ゆへし
さきのおほきおほいまうちきミ　其忠仁公の事也白河の太政大臣と云ふ近代ハおほ殿を前と云ふ其ハおほ殿ニ付す又忠仁公昭宣公の外おほき太政大臣の御忠仁公をおこりに昭宣公をはこ号して
春乃日のひかりに　春乃日のひかりにあたる我なれとかしらの雪

とまうしける時正月三日おまへにめし（召也）
ておほせことあるあひたに日ハてりなから
雪のかしらにふりかゝりけるを
よませ給ける　康秀をよくよませ給ひし

文屋康秀　文屋康秀号文琳三河掾先祖不見

春乃日のひかりにあたる我なれと
かしらの雪となるそわひしき

是解案抄密勘等ニ略注

こゝろ[illegible]さとしたる雪をかゝ[illegible]白髪まちうへ[illegible]

近代もてはやす

雪乃山みわたるとよめる　きのたゝのゆき

雪のうちこのもたる花雪ゆきて

花のちるさとも花のちりくる

春のそらもとめよとよめる　言直　安縄三男

花原のことあそび　内豎　周防掌侍

春やとき花やとき花やとときとゝはわん

うゝひとそ[illegible]ありすもなるる

[illegible]



即れと雪もうすゝ[illegible]ゆ[illegible]さ[illegible]すと行ゆ春の[illegible]八日牧

[illegible]春の[illegible]花[illegible]きら[illegible]ゆ[illegible]きよあらねと[illegible]ハ

[illegible]是於江家島し器義

春のはやくとよめる

春乃[illegible]みね

[illegible]ぬと人[illegible]ものの

[illegible]

寛平御時きさいの宮の歌合　七条后温子

[illegible]時　[illegible]

源さとみ　[illegible]遊院

谷風とよめる　[illegible]

[illegible]

東風に花詩の注を

紀とのり

花乃うを風のとわよるこそ
うつひとさそふみちとへはいやる

大江匡房 貴人男 長門 大蔵卿

雪乃ふるわいつるこそ
まつるこをとれの志ほし

在原棟梁 業平男

春そとそ花も白ねぬ山さとハ
ものうるねうひとうる
春そとそ雪も白ね
山里ハゆきけう雪のうとうきと忘ハわ心地さき



こもり堂 発注と家と見歌

のちくハのはれ
野て西て家住れ
ハ雪氏老を名ちと
ゆと恨ひるこ 家居
也しハ体わ宮あさ
おくハ名くも 発注 恋歌
かすの野ハ人ふハやき
春ハ野を燒すり乃
あれハ野花の人の春
日野ハ人ふハるやきう
春も発れりとうる雪こそ雪の雪のつまとハ雪のの盃的なるこゆをとハ
そを人の書ハらせくハの雪氏書と伝くけハ古き和歌式う
書とハの雪りと云氏ハの雪の書ハ意詞 発注 長歌 伊勢物語と心ハれり
春日野の花人の 春日野ハ燒野とハ人こそ野を七ら者と

よみ人しらず

ちくハのハ
きれハうひとの
なくるるハあさみくきく
かすの野ハ人ふハやきうわら雪の
ハすしこそれわまちこそれ
春日野乃ふハのとわ出てうよ
ハるくうわるくわるかハそん

野守とは一説春日大明神の所領(?)のもりや飛火をあけて烽
燧を行ひけれハ飛火野と云し又春日野ハ烽火のなる
ところや国史に大和国春日野に烽をあけさく平城に通すと
註せりきのこゝろ烽火をたくのハ野守にておもにハ狼煙の説
似つかはしきなり　口訣

みやまには松の雪たにきえなくに
みやこハのへのわかなつみけり

深山にハ松の雪ふ
消ぬに都ハ野辺のわかな
ての野の若菜つむ
とき深山の雪ハ松
を眺望の興とする
和漢乃流例也　詩に満山松雪属誰人と云　誰にか属して松の雪は深山にあり

あつさゆみおしてはるさめけふふりぬ
あすさへふらはわかなつみてん

あつさゆみおして　春雨のふるにつけてさるものか　晴
すハわかなの若菜をはやくとそのまゝにてそれハ梓弓押て
すかとつけはさハ副の字也すもとの字也　口訣

仁和乃みかと　光孝
天皇也小松の帝とも
申仁明天皇の御子也
古き帝をハ年号をもて
申けるなる春のはしめ
つみて若菜を侍り
まて賀をいはふ事
にて奉しり賀の儀なり
君かためにすの野に
君かためなれは我袖に
降雪をもいとはて野に
出て若菜つむとの儀
衣手の儀かねたる
衣袖とも出はれ奇特もなく謙譲乃御詠也

仁和のみかとみこにおましましける
時に人にわかなたまひける
きみかため春の野に出てわかなつむ
わかころもてに雪はふりつゝ
古今集撰せらるゝ時歌をめすとて
歌奉れとおほせられし時よみて
てまつれる　つらゆき
かすかのゝわかなつみにや白妙の
袖ふりはへて人のゆくらん

かすかのゝわかなつみにや　野乃若菜はみな人乃見物の袖

ところはへてくりかへし白妙ハ白きをかねてさはしかりそつて手を
へて日し過し袖ふりすててさけずしも何ぞならうちすて振延と云 乳注に略しつ

春のきる霞の衣

題しらず　在原行平朝臣 阿保親王一男 正三位中納言

春乃きる霞のころもぬきをうすみ
やまかぜにこそみだるべらなれ

春のきる霞の衣とハ霞の衣
ぬきのうすきによりて山風に乱るとハ
霞の衣ハ霞の衣の事
よれるをたとへたる也
すり絹布をうすぬきの衣とよめり
てられとハ乱すとなり

寛平御時きさいの宮の歌合によめる　源宗于朝臣 光孝帝孫 是忠親王子

ときハなる松乃みどりも春くれバ
いまひとしほのいろまさりけり

きさいの宮乃歌合
寛平御時后宮歌合ハ左右ニ番
ふたつに分けて歌を詠せしめて歌を判ぜしむ
めしあはせて講師よみあげて勝負の定をなし

ひさしく勝負を付し定め儀式の風流ハ例法をもちて
本書にかく金銀をもて造花をたて山に歌をつけ
もし何かは院の大宮の白河院の御時まで有けるに
ときはなる松乃みどりも春くればいまひとしほの色まされりと詠
秘口訣

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる　つらゆき

わがせこが衣はるさめふるごとに
のべ乃みどりぞいろまさりける

わがせこが衣ハ春雨のふる
せこ衣とハ衣をもて春雨の
ふる事をいひかけたり
つけるわがせことハ夫を
いふ　秘口訣

青柳乃いとよりかくる春しもぞ
みだれて花乃ほころびにける

青柳の糸よりかくる春しもぞ
此のまへに花のほころびにける
みだれて花の糸よりかけて花のほころびにけると云

やなぎハ春やはらかしといふ心を中暮きてまろしとういハまうさく
いとさへかゝるとより
まの柳ゟ緑の糸と
よみて白露を玉
とつらぬきたるけしきを
也歳よりハやうす
春乃柳の花也
柳ハ柳にして青き
たゞ青緑糸陰也
柳なりと
もゝちどりさへづる
古今三鳥の一也
をちこち乃たつき
をきもしらぬとハ
何とも知らぬことよ

西大寺乃ほとりの柳をよめる

僧正遍昭　俗名良峯宗貞　大納言安世子

あさみどりいとよりかけて白露を
たまにもぬける春乃柳か

題しらず　　よみ人しらず

もゝちどりさへづる春ハ物ごとに
あらたまれどもわれぞふりゆく

をちこち乃たつきもしらぬ山中に
おぼつかなくもよぶこどりかな

雁ハ三春の頃より
春くれバかへるなり
雁の陽をおもひて白雲の中
路に越て越へゆき
こし人をおもひて也
むかし蘇武が雁に書をつけて
秋にもしらせしことより
いはゆん道の道行
觸として書をつけて文
通用の越の御神
ことを消したるかな
春かすみたつを見捨
霞の棚引去れ
故郷にやすく帰る
ては雁ハ花咲なき

かりのこゑをきゝてこしへまかり
ける人をおもひてよめる

凡河内躬恒

春くれバかりかへるなり白雲乃　雲イ
道ゆきぶりにことやつてまし

帰雁をよめる　　伊勢　大和守継蔭女　七条后女房

春かすみたつを見すてゝゆく雁ハ
花なき里にすみやならへる

題しらず　　よみ人しらず

おりつれバ袖こそ匂へ梅乃花

よ経のうくつまきて
おりつれハ袖こそ匂へ
梅折つる我袖の匂ふ
にと花のありとやここに
鶯のなくと也
いろよりもかこそ哀と云香の事もあれと其香ハ誰かあはれとおもはれ
是ハ誰か袖ふれし宿のうめそとあはれとは吃する心也 字
乃あはれ 朗詠 但馬大夫様 梅の字も云様ひとしく梅同しく字の
濃紀乃匂ふ乃袖の香梅花かうつりて匂ひをとゝめけると
いつはかれの紀今ハ泳すへけると也 愚案漢和朗詠銀盃草子考
当ちりし梅花より
あちきなくいかひ
ゆくのちも今ハ何ら
きのうの紀不可縁
梅乃花よそほひ丹

ありとやこゝにうくひすのなく

いろよりもかこそあはれとおもほゆれ
たか袖ふれし宿乃梅そも

宿ちかく梅乃花うへしあちきなく
まつ人乃かにあやまたれけり

梅乃花たちよるはかりありしより
人乃とかむるかにそしみける

花の陰に立よる程
まても人の見とかめ
とかむるほとの梅
の香の袖にうつる
なとし 口訣
うくひす乃笠にぬふて
是ハ鶯の青柳
をぬふといふて鶯
乃ぬふといふ笠ハ梅乃
花なといふ事を本にてよめり花の滴を笠に似せて鶯や笠
おひてきかさんといふてよめり笠をいねよ梅乃花ハ柳の糸にて
ぬふてきかさむ也 ねむ香ハ鶯の笠をぬふと云に梅花をおりてかさゝん
わかそらの隠るやとく
よそにのみ何かれとそ
よそにのみ哀とそ

梅乃花をおりてよめる
東三条左乃おほいまうち君 源常 渓氏
うくひす乃笠にぬふてふ梅乃花
おりてかさゝんおいかくるやと

題しらす 素性法師
よそにのみあはれとそみし梅乃花

みな梅の匂ひねと　匂ひねハよろりハ甘かりく盛なり
香ハおりて知られさる　梅乃花をおりく人ふとかり
ごと　なる　ともの
きえすりて誰ふか
梅乃花え香も　きえおりて誰ふかの見せん梅乃はな
知人ぞそハ志りねと　いろをもかをも志る人ぞ志る
花のみハ誰ふ見すす
よそふとて見を志りね　こゝろみしくよめる
人ぞ梅をともすれ
かひなき心
梅乃花ふおふまふ六　作りゆき
梅の匂ふまふハ暗部　梅乃花ふおふまくハくらふやま
山を闇ふこゆれと　やみりこゆまて志るくそありける
香ハかくれすなり
あらと毒の匂ひを賞して暗部山ぶをゆかりてよむ山様の

名をし春へとハ春部しまひや
こゝ歌し但万葉ハ春部春敵と云志り後集の字本字のごとく
かみすりかくる万葉らるの春さるの川家の春御ハまいま郭と際
なるも旧集で春敵さく花のらえたるやすをさぬる春りあさころと
ほりハ児等之名之所居
月夜りハかれども　月夜に梅の花をおりてと人乃
闇りこそかいらせ　いひそれハよそふくよめる
月夜にハそれとも梅
乃花れもゆかきかとも
まふらハ香を知そ
志るくまこいふんとそ　月夜りハそれともみえず梅乃花
みや白梅をそえわ　かをたつねてぞ志るへかりける
みすとみて　見たね
春乃花やとゐ闇達　春乃夜の闇梅乃花をとよめる
まの匂れ闇ハひ　春乃花やみハ何やかし梅のを

もし梅花の色
をハ見せねとも香ハ
えかくさぬとなり
師説ニ隠ス 有
はやくといひしハ云ハ
いかなるをとかいふ
さるゝをといふ事也
よしみあはれと
いへる月しも卑怯也
ふかくいふ思ひの無念
さいはひあやなしと
まさしいはんとする
[illegible] 口訣あり
こゝろも
人はいさ心も
貫之ハ文章の初

いろこそ見えねかやはかくるゝ

初瀬にまうつることにやとりける
人の家にひさしくやとらてほとへて
のちにいたれりけれはかの家のあるし
かくさたかになんやとりはあるといひ 口訣
出してはへりけれはそこにたてりける
梅花ををりてよめる

貫之

人はいさ心もしらすふるさとは
花そむかしの香ににほひける

此乃紙書の上 竟宴ノ説 家あれハ住ねはあらかしの久しく出つれ
ねとて旅なるをとかこなる梅花を折て花の香ハむかしにかハらす心
中を花にたくらへてよめる哥の心いさしらぬと云事 哥口訣アリ

水のほとりに梅花のさけりけ イキも
るをよめる

伊勢

春ことになかるゝ川を花とみて
をられぬ水に袖やぬれなん

春ことゝハ毎年也
川にうつれる花を
みてをらんとするに
折れぬ水なれハ袖
やぬれんと也 口訣アリ
としをへて花の
鏡になる水ハ花の
うつれハさそ曇
ると也 花の鏡と
ある事ハ花の影をうつす
毎年花ハちりかゝれと

年をへて花のかゝみとなる水は
ちりかゝるをやくもるといふらん

毎年ちりかゝれとも水ハ曇らすと再云て
花ハかりよけれと梅ハ柳ハ梅 此哥口訣

くるとあくとめかれぬ
暮ても明ても見
かれずみる花の
人のねぬ間にうつろひ
ぬるぞと也晩明と
ふかれぬ物をと
目もはなれぬや目
不離と云義也人の
かはりてちるを

家にありたる梅の花のちりけるを
よめる　貫之

くるとあくとめかれぬ物を梅花
いつの人まにうつろひぬらん

寛平御時きさいの宮の
歌合のうた　読人しらず

梅かゝを袖にうつしてとゞめてハ
春はすぐともかたみならまし

梅がかを袖にうつして
香を袖にとゞめて
よしやちるとも

素性法師

ちると見てあるべき物を梅花
うたて匂ひの袖にとまれる

ちるとみてあるべき
物を梅の花
うたてにほひの
袖にとまれる

題しらず　よみ人しらず

ちりぬとも香をだにのこせ梅花

香をとゞめてこせ　こひしき時ハおもひでにせん
近う来時にひろ　人乃家ゟうつしかゝる桜乃
へきこと　花ゆきりゆかしかるをとてよ
こゝろゆすも知ぬる　める
咲ゆくもちりぬ　つゆき
あれさくらちるをみ　こゝろ春ちりくもるさくら花
すへ家ひとと説　ちるとはいつともあかぬハゆくすん
言なり　詠ミても　読人不知
山さくら今もすさめぬ　山さくら今もすさめぬさくら花
春ハいろこの山乃花
さも人乃見るを
この桜さびしく　いつはわひうわさ見んさん
そなする今もきれ
をなにか我見ん　又ハ里ちか人もすさめぬ山桜
くもれるやさん

こゝろをすてゝめつすさめねそ不愛也すさむハ愛ずる心
此世俗ゟハおわりてそとさす也むいうこと
よみ切く古信かとよむへし　哥乃尤の又ハ里ちかく二ハ吳
説あり八様ゝしてよける　西集の哥ゟおまし
古も乏ゟ哉し　此哥ハ猿丸大夫家集に山里にまのかけ
あれり花咲ちかゝるを見ていとゆり　聞書にも其もすさめ
ねあやめ草かり人乃こねのわひしさ　香をとめてる
人ゆるをはやめ草あやしく　路のすさめさりける　山里
路のそれねをすさめねと云　寄ゟすさむ草の字也
山さくら我見るの礼　山さくらわか見るにそれハまたすさ
山桜を見まゝする　花ねむも於まし立かへて行く
おかすても電の　とめとのゝきゝのちのかまくらに
かすむやみくる
さ日やとて口訣

深殿の仁和の御代昌泰
三年四月十日崩七十二
太皇太后宮忠仁公の
御むすめ
うつくしいよりひ給ひ
なりまさる桜を
殿の容顔麗な
れば所々又月毎乃
なりひらの
とよめる歌
世乃中よりて桜乃
歌と不歌との
二つ乃心を歌の心
中くらいなりんと
なり思ひなされるや
いかくされうき世乃
うけ是なりとあつのさ
是ひとしき歌
なりける所なる
嘲ける所をも
おつる所をも
て彼の所を
ちる所をも
ぬ人をも世をき恵

春乃めは桜乃花をさきせ
まるを見てよめる
おのの小野きかはいまうち
忠仁公
うつくしいよりひとおひねもらはれと
花をしれいはおもひもす
とあまりをきとあれいらの
世乃中乃ものとけうしまし
なりまさる
あきされはんまく桜をさて
よめる
在原業平朝臣
桜乃あるせい
世乃中よりて桜乃
歌と不歌との
二つ乃心を歌の心
中くらいなりんと
なり思ひなされるや
いかくされうき世乃
うけ是なりとあつのさ
是ひとしき歌
なりける所なる
嘲ける所をも
おつる所をも
て彼の所を
ちる所をも
ぬ人をも世をき恵
六歌仙 在原業平朝臣
伊勢物語有常母
春乃
歌と不歌との
二つ乃心を歌の心
中くらいなりんと
なり思ひなされるや
いかくされうき世乃
うけ是なりとあつのさ
是ひとしき歌
なりける所なる
嘲ける所をも
おつる所をも
て彼の所を
ちる所をも
ぬ人をも世をき恵
素性法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃御ものゝ　僻案抄云
雅りとめてわつてとてんとすることのす
くるれいられりもとりの山の
ふもとりの枝い僻事とゝ
をそつるゝ　ゝ乃宮ゝ
さくこむとて　寛也　雪ゝふ
きおさすいゝゝ
乃神　　歌字義略
ちくゝゝゝ
桜の原きゝゝ山の
ひゝゝ白雲の
ゆゝとゝ
もゝくさゝゝ
ゝゝゝ舟
川乃山ゝゝ

舟なれとおろせきしゝ
よゝみゝゝゝ
ちくゝゝゝ　　夏應太
山乃ひゝゝ
ゝゝとゝ

見門ゝとゝ人伝れとゝ草ひきとのゝゝゝきとありゝ
ゝゝゝと一条桜岡浄瑠　ひゝ嵯乃宮　山乃ゆきあひさ　歌註
ゝゝ世代
みゝゝの山ゝゝ
山ゝゝ花の白ゝ
ゆゝ雪ゝとあ
ゝゝゝと

寛平御時きさゝ乃宮ゝ舟合乃
ものゝ

さゝゝゝゝ
桜ゝとゝの出て
ゝ乃ゝゝ
ゝゝゝふも人の
心なゝれぬゝあ
ゝゝと　歌註　家歌略抄

ゝゝゝ山ゝゝ
ゝゝゝの
雪ゝ

ゝゝゝ
ゝゝ月ゝ

伊勢

さゝゝゝ
人乃ゝゝ

信教胡臣家本よりあれやはてるを熟せまてるとし後恵
つはるとも行るを宝蓮をもはなりくるなあひはきのそやう
乃様芳のをきやうりはあすは寿はさうるをよびてと
さへて（きうんよきものうへきを年をも人うあうれもむ
ひくいうんやうよ教てうる羽をれはあれやはせねこう叶ひ
て作れはさうるを只のをきやうと同しうはくあうれやは
せねしいれすあうれやはすることうはるを芳下よ枝柄の
きしりやうりすとよくはるわくへとうり羽つひ同きうと
うとうはるきやわひをてねうを世年のむをすきるを芳るし
はるとうりと名をうう
芳はちりやすく
はるをうをうるを
てかくれるる人
をも結はれはは
をうりとうり

楊乃芳のさうりはくしくとてし
さりはるる人のきはりるる叶はよ
みるる　　よみ人しらず
はるとありとあるをうをうをれ楊も



くるをすははすは雪と
芳をはるるをぬ由
をはまと我々年
はは人こうはるるき
やうれあすは雪と
除て消すはるも
芳とは又中きと
せ云ふの芳芳と
　　口訣
ちりわれはこれと
楊乃くきりとえゆ
きはるるはふ
すとも　　口訣
りうとはりはは
なきは芳のおきうりあるは

うはまれるる人もちりくり
　　葉平胡臣
くるをすははすは雪とうはるるま
きはとそはりはも芳と又中やや
　　よみ人しらず
彩きうきと
ちりわれはこれはきとうるき柏を
くるをうはるはりはうれはてめ
おはとうはりははもあるう楊も
いさやとかりてちるまてはうん
りうとはりはは
なきは芳のおきうりあるはうりてちるまてはうんとうりはるはは

小まつり

さくらいろの衣かさねてちりぬるを花の名残はかきのもとかな

きのあつみ　有朋　文政文政病

さくらいろの衣ぬいでうめてきん花のちりぬるかぜのなごりかな

桜乃花さくらいろと衣ぬいでうめてきんとうてきちりぬる人なりけり

桜

とりかへる　みたれ

わかやどの花ちりぬるを人とはゞ

ちりぬるのちりぬるこひしうるをこ

亭主院所合乃時よめる

伊勢



うぐいすのかへるの山里乃さくらの花

ことゝも花ちりぬるをこゝハ

花ちりぬるのちりぬるのちりぬるの

山寺桜に詠

乃ち人もあさやまたもの人めまれなる山里ハさくらの

ちりぬるをほうさけとをしへてくるなり源氏乃宴ハとき

のちりぬるあれハさくらひとホとゝこれ花乃

ちりぬるこゝろなり

古今和歌集巻第二

春歌下

[illegible]知　法人忌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まつのくるとあるに雪のかゝるきくすまとも梅ちる
本の下風いかに日をかさねる梅の南無ゆられさとく梅ちるれかゝるよ
むかしきさらぎ
はるの花歌

梅乃花のちりはてるいとくもの
くるる　　うせいぬし

花ちるとはなれやと風乃やとりい誰ちる
月を知る人のいとゆきくうぐん
梅ゆきをしのばるゆきくうぐん
にてはきたりくる梅乃花をよめる
ぬむしまきみと
いさ梅我もちりぬん　　うぐく清

いさや梅我もちりぬ
むしの風ふるいとうぐ
うきやとうぐん

いさ梅我もちりぬんひとさうり
はりふるとうぐ人うぐきめてうぐん
はひとりはるる人のうてきて

かりまるとうぐや
みくらのうぐ歌
ひとめるとうぐ花をとうぐ
はるるとうぐ人乃ふきの
やまきらふ梅
てまるとうぐ
ちれとう

かりまるのちよまて花さ
きるとうぐ　　はるゆき
ひとめるとうぐきみやとうぐ梅ちる
ふるとうぐちるとうぐ
山乃さとうぐをとうぐ
まるかすみあるくすんぐ花
ちるやをとうぐ
こうちるとうぐ
時ちる風はるとうぐ
こめくの子はるはひとうぐ

内大臣の若女房侍

東宮雅院

菅野

延喜十六人

[illegible]

ひとはこころの風も吹あへぬ
さくらの花はちるとよめる
紀とものり

[illegible]

[illegible]

春宮の[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪とのみふるふるをさくら花
いろはちきとる風のみてらん
ひさのをりてゆかまうてき
てはよめる　けゝゆき

山さくらみんけゝわさうけゝる花
風ゝこゝろまかすゝてゝるり
紅葉をゝ　一本　大伴くろぬし　是主用悔吉作主

雪とのみふるふるをさくら花
いろはちきとる風のみてらん
ひさのをりてゆかまうてき
てはよめる　けゝゆき

山さくらみんけゝわさうけゝる花
ゆゝすゝかゝるゝあれ
なゝて風のさゝあゝ
きにけれと沿をか
りはやりていふ心
但せちすゝんと
るさめのゝるハ風の
人ゝゝ花のちるを
ゆゝゝちはぬ花れハ
ま雨の降ハ涙ゝゝ

亭子院屏風

人ゝのゝハ河の岸ゝ
さゝゝまゝちゝわる
花の散わる風よ
さはきそ京よ波の音
とゝゝゝ　在原

ゆき

さゝゝまゝちゝわる風乃ゝ
ゝゝきゝゝ波ゝ立ゝ
ゝゝ乃みゝゝの
平城天皇　大同天子
宮廷ゝ自筆ゝ
けゝまゝゝ
ゝる所ゝ國ゝの
古里とゝる所
都ゝもゝハゝ
かりゝす花ゝさき
ゝゝゝ最
花乃いろハ盛ゝ

ゝゝ乃ゝ風ゝ
ゝゝ乃ゝ
ゝる所ゝ盛ゝ乃みやこゝを
ゝゝかりゝす花ハさきゝ
春乃ゝゝゝてよめる

ゝみゝ乃むねゝ
花乃ゝろハかすみよこめて世すゝ
ゝを
ゝふねとめまゝ乃やま風

[illegible]

寛平御時きさいの宮の
歌合のうた　素性法師

花の本にいまはかぎりと
うゑしかど
人の心の
あだにうつろふ

春の来ぬ
[illegible]

春の来ぬ
[illegible]

春の来ぬ
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

て花をわすれぬ人こそ花の人なれ　又説に人こそわすれ花のひとくさ
はなを見てのみなれば今はと花をわすれぬとなり　つねに梅花を愛する人のきくにつけてもとある同さ

寛平御時きさいの宮の歌合の
うた　　在原のなりあきそ　道成子　業平孫

ちくさにものをおもふ春は
人をおもふ花をうらみて
なにごとにつけてかは
を恨ぬるとなり　心
を毎にもちちくさ
多種　多くの意

春ゆくかたをしたふ
るひとやまれ花のゆくへも
しらぬ　やまれ花のゆくへも

うるとてはなとうらもいはれ
ちくさなるこころをもゆるとなり　ちくさなるこころをもゆるとなり　これをちくさとよめり　次の歌も



同心
まつもとをちくさ　山乃霞乃くさひくくさのなびくくさ
いろの花乃うつろひくさとなり　ちくさ
むすぶくさ　かすむ山ゐをくさ

在原元方

ゆれとゆるくさ　霞ゆるまの山ゐをくれと
うつれて花の白ひ　ゆきくる風ハ花のうつする
くさとなり

花をれいこころ　うつる人ハ花をとくよめる
ゆくくる花をうつ
うつるいろくさ　ゆく
きこころれ　花をれいこころ　ゆく
花をゆくこころ　ゆく
はいてて人をうつれ
はいてて人をうつれ
花をれ　よく人をうつれ

うらびとのうの
のうちより雪の降
もとりわけそを
くるようつろの花は
風さへ吹わたる
ゝ風をあきて雖
雪ハ風をあきく
うちよ我ハ花は
ゆきまくもちり
さまとも口訳
ちる花のうつり
ゝるゝ雪の降
これ花の花の
れわるゝハ我
る〈きりと〉ゆ

うらびとのうの
のうちより雪の降
もとりわけそを
くるようつろの花は
風さへ吹わたる
ゝ風をあきて雖
雪ハ風をあきく
うちよ我ハ花は
ゆきまくもちり
さまとも口訳
ちる花のうつり
ゝるゝ雪の降
これ花の花の
れわるゝハ我
る〈きりと〉ゆ

仁和中将乃千ヤとん西の家ふ
舟会せんとてく志ろるけりよ
める

デシエ子ヲイコ
典侍滋子朝臣 名浅茅舎
ナイシノスケ 或説

千ヤゲ 中将長有卿子
在原業平 業平朝臣
右の将



花のちるこゝろやうつりやすきる霞
立田の山ハ雪の色
ハ花のちるゝ俗
しさにこゝろうつら
ゝ霞ハ立田と
いふ〈名所〉

こゝにくハ花の飛
をの風ちる花
を推ふ志わさよか
わせ〈ゝ地わひ
よりわ〈ハ〉ゝとい〈可ハ〉
ちりゆつる雪ハ
おゆ〈おるなて〉い
ゝ出せるゝ

うせい

こゝにくハ花のあの風ちる花を
名ゝ雪ゝ
おかせ〈ゝこゝちちらん

花乃ちるゝこゝろやうつりやすきる霞
立田の山ハ雪の色
ハ花のちるゝ俗
しさにこゝろうつら
ゝ霞ハ立田と
いふ〈名所〉

雪ハ雪のあるゝをよゆる

こゝにくハ花のあの風ちる花を
名ゝ雪ゝ
おかせ〈ゝこゝちちらん

コト

雪乃花ハ雪のあるゝをよゆる

ケ作ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いつさうのあさ
春乃山へをさえ
それはるもさりやう
すゑのちるとも
花をなほよう
ていろさりあを
いるやすく不敢
うり

春乃野うりわる
若菜つみて
まの野よりいとも
を花をなく
ひとすりしいと
四月菜をえねと
さりふたり

さう乃山とよ安乃野うくあ
里ろうまみくつうる
はるゆき

みちもしさりつるれ山へをこれそ
ちもしさりつへと花う安ろる
寛平御時きさいの宮乃哥合
乃うた

春乃野うわるはんとう物を
つ里ふ花うろはまもひね
山ちはまてうろまめる



春つめ八若
菜といふ七月八日
よ時すり原法口訣
やうりくまの
うつふけりを
菜ろる物れて
花のちるこそ
ゆうり

ゆうりくまの山
菜といふ八月
よ時すり原法口訣
やうりくまの
うつふけりを
菜ろる物れて
花のちるこそ
ゆうり

寛平御時きさいの宮乃哥合の
うた

ちる風と谷乃みづ
いつともなくぬぎの
谷川よ流れ
をんく花を風
いうきゆれ
乃谷川よちる
すはいそてら浦山

ちる風と谷乃みづ
いつともなくぬぎの
谷川よ流れ
をんく花を風
いうきゆれ
乃谷川よちる
すはいそてら浦山

ちる風と谷乃みづ
いつともなくぬぎの
谷川よ流れ
をんく花を風
いうきゆれ
乃谷川よちる
すはいそてら浦山

備正遍昭

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やまもきいはやおあさきそれとん
山吹ハうひうこあさき　うくんそうこひこあるる
うそらんとそうへ　よりかりのかりかる山吹のさけ
けるそらこそいとね　見るをよめる
いを人よ向ひくれ
るやふこかりかや　けしまき
ふハかやうのしよ
まを略しるかり　吉野川きしかり山吹ちてせる
かやうにいうし　うこかりけさうかりひよりかり
吉野川きしの山吹　紅さくを　よ人さくを
宴の山吹のさかふ
そてつるを吹風の三
わさをや屋の新さ
へうろひわをかり

くわうこうこうの人のいろく物乃
きくもの寿乃
清夏贈答
清滅答文語見る遠
春乃うこてよる

うせい

おりのとちさ乃山てうちひきて
うこうもいてね様ねりてうの
井るにもを亭性
よ山吹をう地り
地をえをうく花見人懐の遠ときれ
とうくまき物をとり山吹と懐ををうよりれ
よをくまくとされ乃
おりふとちまの山へ
宴乃すの様ねりけりうの
くわうこうこうの品
宴乃うこうの山吹
懐乃うくの山吹
わうこ山吹の宴
乃りれをえゆれハふ
宴の風ハさうけ乃
とえわるをとを懐
うくるえハ懐覧
井るにもを亭性
よ山吹をう地り
地をえをうく花見人懐の遠ときれ
とうくまき物をとり山吹と懐ををうよりれ
よをくまくとされ乃
おりふとちまの山へ
宴乃すの様ねりけりうの

[illegible]年月乃春くすぐるハ老をいたるとを[illegible]

春乃うくるをよめる　みはね

[illegible]つとう春ことしよりの年月乃
[illegible]
やまひより覚れ老のひさしう吟之
さわらるをよめる

はらゆき

春とはるる花乃ちるハ覚
[illegible]
やよひ乃はこゝろかるる山を

花ちるるこの春ふく谷川よ花乃ちりぬるなれ
みよもとうひてなれ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

こゝろもとなけや　常ひとしくせよ
一とせに二たびくる　きさらぎとこゝろ
すなけ　常なれば
しきみと　方
花つとり　花つゝ
花摘と　春の
物を　問へ
とわ　まる
そむ　き物
そむ　き物
ちる　花
ちる　花
花　花
花　花
花

わゝやとの池の蓮波
まさるを夏のまり
池の蓮の子供等
れい郭公を
出さく初音とう
ゝけんとの蓮
まさるを夏の
拾ふれハ夏の
よへる蓮とか
と波うちよせく池
乃とよりの榜本人丸と哥ゝ
うへる上古乃人をハ
わゝやとの池の蓮波はきうりの
夏哥　頌不知　法人きつす
やまかとうきすゝ川うきまりん
この哥ゝ
うちの人丸ゝ
哥ゝの人乃ゝ
ゝ
哥ゝの人丸と哥ゝをよるハ万葉
ゝ
うけきまさるる榜と人ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四道同寺の神うけ給へく山ゐ（きれいむ）の人の社の者と
いとゝてを定家の梅乃香何社やくもはかりん（孔子宗勘略）
いけ乃ゆうさ月
時乃うてとかれを
るてゝる郭公の音
うにわもわきて思
のゆたる月きぬん
とうり

けさきるきゝやう
と名をゝ乃様の元
ある郭公ゝれ乃花橘
よ者ハうれと様人な
とる者をそゆるこ
とくたつりけきき
ゆきぬ（ゆ）ゝ

いけ乃ゆうさ月きぬん是ひさの
やまかとゝき寄ゝゆうゝあゝ
けさきあきゝゆゝ様ゝるかとゝきす
そゝゝゝ乃ゝるゝりやとそ乃ゝん
青郭公をこてゝる時よ郭公の時
をきゝてよゝる きゝゝの力
ゆゝゝ山けさこて元ハ乃ゝきす
こすゝゝるゝりゝゆゝゝあゝ
郭公乃ゝゝゝあきゝるとき

てよゝる

うせい

かとゝきゝて初こ為きけハ乃ゝきゝ
ねゝさゝゝゝね為せゝるゝゝ
郭公乃初こゝきけ
ハけとゝくけゝき
あゝゝゝ心すゝくゝゝ人をゝゝゝゝゝゝ人ゝゝの為ゝき
心乃行ゝとゝ元ハねゝゝゝね為せゝゝとゝゝ（父多）ゝゝ将當
ハゝきゝゝゝゝゝゝとゝ郭公ゝゝねとゝ神ゝゝひのハゝゝせの
森乃ゝゝゝこゝゝハゝゝゝゝゝゝ我為ゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛平御時きさいの宮の歌合

紀友則

[illegible]

大江千里

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ほとゝきす人待山と時なるの明
ハまるやきやう
よのまハやて我
庭のまさこと云り
松を待よりこの年の
松山いさ為まき紫
徳院の往せうひて
為ハ松むすしよ四
せるゝ山ホと詠
むり〳〵やいやし庭き
雲や今し来〳〵お
ぎハ郭公の声を
まて明わんとて
四不如帰とゝ

山ほ郭公乃あきなるをやゝく
けゝゆき

ほとゝきすてきを今ハ山ほちゝ
わまうちに者をこひまきわゝを
をやく信ゝる所まく郭公
乃あきゝゝをきてよめる
ゝゝみね

むり〳〵やいやし庭きかとてきす
山ほ郭公の声をまて明わんとゝ
かとゝきすの明ゝるをゆて詠



心ハ松をを庭くくむり
〳〵ハ雲とりひゝ〳〵ゝをき
らねハむり〳〵とり傳集
かとゝきす我こゝをは
我やくハ為ホ夏
時ほ明と云り和むり
き世とうけて云り歌
えちすはの山ゝわに
蓮華の開りは三まぬ
法華ゝる心を持ゝり
あと歌を引て尺す
ゝり三真ほこゝ作る
〳〵れと云りはきむく
ハ詠字〳〵備すり〳〵
乱心法華経云不染

みたれ

かとゝきす為と云に和の花
うき世れあのゝりあきわゝるん
ちすれ雲を乃ゝよめる

備正遍照

ちすれ乃ふこゝは雲ぬ心ゆて
かふゝて雲をゝあとあさむく
月乃なゝわゝゝる表あゝ
きゝゝる清 ゝゝ
衣乃表ハまゝゝゝゝ明ぬるを

世間法如蓮華泥に方
夜乃よはにすこしかたむく
宵のうち夜の長に成る
といつの夜よ月やとる
らんと月に成る心口訣

ちりをふすべしとう
釋めるに家の妹をやる
こゝろ〳〵にちりむつも
きむれば塵をくます
へしとやみと心家と
家は深て家は驚の
ゆゑ秘れいちり口訣
夜と秋とゆきゝふ夜乃ちりを
夜と秋とゆきゝふ夜の
の夜よはくらく深き風や吟んとゝり秋の夜深く宵過るこゝに行方と云

ゆきゝ
ちりをふすべしとう月やとるらん
とるとよりわ常夜乃形をこゝにとゝ
せちれいわ月みくゝ吟をよみて
はりてる　月はね
ちりをふすべしとう月
いもとわつねるこゝちりを
みる月乃はこゝわ此日よりる
夜と秋とゆきゝふ夜乃ちりを
かゝるすゝき風やゆくらん